

長野馬貞「追悼曉塚集」

松本義一



追悼

浪花野坡門の有力作家、豊後恵良邑（現玖珠郡東飯田村恵良）の馬貞が歿したのは、寛延三年九月十九日であつた。享年八十、法名釈教榮。その七七・百ヶ日、及び一・三・七・十三・十七・二十五の各回忌の諸家追善を一巻に纏めたものが、菩提寺明厳寺（恵良）に蔵されてゐる。これは元來冊子（全七十丁）であつたものを巻に仕立て直したのであつた。

馬貞に就いては後に掲げる、子息古桂の馬貞追悼文に讀る事として、ここでは新資料たる本追善集を一覽しつつ、馬貞伝に役立つものを抄出することとした。

先づ龍門寺（現玖珠郡東飯田村松木）白華亮堂（馬貞と親交、時に八十歳）の漢文の序を掲げてゐる。

……一旦自ラ世ハ全ク是レ夢幻空花ナリト悟リテ、曾テ家業ヲ其ノ賢嫡古桂ニ譲リテ、自ラハ彼ノ俳諧師坡翁ガ風ヲ學ンデ、到ル処月ヲ詠ジ雲ヲ觀メ、悠々焉トシテ其ノ樂ミ廻然タリ。嗚呼（マ、）誠ニ是レ近世希有ノ一風雅士ナリ。……

○註——「豊後国玖珠郡恵良村黄船社縁由記」（明厳寺藏）に、「天正十九辛卯曆九月十五日、庄屋元祖、長野佐右衛門次郎統直」とある。元來長野家は庄屋であつた。尤も同記の延宝七年の溝口太左衛門資快の肩書には「恵良村庄屋」とある。

右の序に続き、

悼遠山翁

さすがにたのミおきしふるきちなミのかたにおくれて、

浪花高津野、翁翁緒

紅葉せぬしのぶはかなし白錦

改

女

長野馬貞「追悼曉塚集」

薬月末のせうそこ、孤禾亭よりとゞきけるに、後の月も、「橋かけん杣の枝葉」とも心よく興ぜられ、やがて二三日のいたづき、十九日終に身まかり給ふよし、その傍を見るおもひに、

浪花市中庵

行秋や霜のあしたの佛只

梅 徒

を掲げ、野坡門の色彩を濃厚に打出してゐる。かくて森の徐囃子の句に続いて、古桂の追悼文（後記）を記し、門下の鯉木・孫利錐・古桂妻等十五氏の句、三氏の漢詩、十氏の句等を掲げてゐる。

○……予其膝下に有て、明暮父のごとく、予のごとく、瀧恩山海比するに足らず。……鯉木拜

○甲子主馬貞翁ハ多年の友どちにて、五日を隔ず膝をよせて風雅を拾ひ、或時ハ飛角をならべて戯れ、むつミ深く、後の良夜ハ不老軒に八十の兎角を振り、連衆の句を白筆にものして、夜すがをたしミ給ふも風前の燈び、されバこそ居待の朝影とともに、黄泉の旅に趣（マ、）給ふ。……不老軒山考

○……予其雅門に育られ、年來のしたしびふかく、庵居に語り、茅舎に杖をならし、風情を細吟し教へ給ふ愛惠浅からざりしが……松風舎
芳秋

七七日 追善

先づ甲子庵の図（図中に見える「甲子庵」の額は、前記白華亮堂のものするところで、明厳寺に現存）を掲げ、甲子庵における、初七日・二七日・三七日・四七日・五七日・六七日・七七日の追善俳諧の表六句（祭句は何れも古桂）をのみ記し、更に一七日の梅従、五七日の水（前前権田）の句について墓石を図示してゐる。それには、

寛延第三祀龍次庚午

誹狂馬貞遊士

曉 塚

九月十有九日

とある。

○註一この墓石は、明厳寺左方の山の手の中腹、長野家の墓所中に現存する。写真参照。

四十九日は、廟參後、甲子庵において百韻を興行、その初折のみを掲げ（山考・古経、その他二十氏）、更に五氏の句をも収めてゐる。

百ヶ日追善

古桂・利錐・鯉木の句。

諸家追悼吟

諸家追悼の地域は、前・後・薩摩・肥後・筑前・筑後・長門・安芸・備後・浪花・河内・山城等に互り、その数百二十氏、別に表六句（六氏）・漢和八吟（八氏）等がある。かくて寛延三年臘月中浣、馬貞の親友菅居中ものする漢文の跋を以つて結んでゐるが、居中の記すところによると、子息古桂は本帖を「追悼曉塚集」と名づけたのであつた。

○……世にありし日は度々の吟杖を此里に立たまひ、風雅耳ちからを添られしを思ひやり……眞玉（豊後）五風

○……此翁、在世のほどハ、ともに風雅の志を誦ふし、水魚の交り浅からず。交毎に誦する詠吟の中にも、「雪降を机にさわす柳哉」と、嵐山の雨の明ぼの、独樂の淨情を盡し、あるハ雲水の旅客に遊び、竹杖一本の自由は、ぬふてふ鳥の翹よりかろく侍らんと、急に小雨の冷し麥と圃戸をさがされしも、周く世のかたミとハなりぬ。さらに赤心に任せずト庵室に頭絶（マ、一陀）を休め、「夜を飽て鳥に風ひく落葉哉」と、老後の一句には落付給へども、「世に飛ばば鱗を喰はん初しぐれ」とは、またも道祖神に誘引せられ給ふかと、杖立るを待しに、此春ハ八十字の開曆を笑みて、「盃としも似たり積日の松飾り」と、ミづから祝し申されしも空し。猶其比ハ、種冷の朝暮いかゞおハすらく、と尋し文の返しに、「鶉鳴や物善好の寺誘ひ」とハふしぎ成る云の葉かな。程なく彼境にさそハれ、教榮居士の改名ハ得給ひぬ。……高田（豊後）孤樂

○……一とせ穂薄の高□もあなめくくのむかしと成行浮世かなと老涙を押へかねて……椎田（豊前）万水

○……往昔亡父が交りよりかぜふれば、五十とし餘り三年に過たり。……此秋、袖富山の月にめで、わすれがたミになんとゞめられしと聞ゆ。……豊前大橋有隣

○馬貞翁、袖富の嶽の名月に、八十の夢を覺し給へるとなん。喜慶庵宝水

○……或時ハ子が茅屋に行脚の杖をやすめ……中津（豊前）魯朝

○……或時ハ子が茅屋に行脚の杖をやすめ……中津（豊前）魯朝

るに云葉なし。肥後楚山

○……葉月の比しもハ、互の無事をとひとはれ、殊更数々の秀吟をたうべけるも、今ハなき魂のかたミをしいたゞき……筑前甘木柳子

○甲子庵の翁と予風月の因ミを結ぶに年有。朝倉の花鳥に幾年か浮れ来て、我草庵の薪水を共にし、或時ハ相蚊舎の疎言をゆすられ、扱や吉備の山踏に同じき杖を禿しぬ。一とせ予ハ巖嶋のかたへ見送られ、翁ハ赤間が間に溜りて、「厩といふも臆聲也けり巖しま」と餞吟に涙をおとして別れを惜みけらし。おもふに去年の彌生にや有けん、追息（マ、）打黒ミて、娑婆の名残を惜しむべきに、かならず越山せよなど、胸に

思召て、けふよ明日よと思ひ暮せしに、春笑坊が告に、去年の菊月に身まかり給ひしと聞に驚き、浮舟の梶を絶たるがごとく、忙然として玉ゆらを分す。朝倉の丸が去年の春無き魂を吊ひて、我も五日の呼子鳥とハ其魂や知りつらん。……朝倉（筑前）遊五

○甲子庵の主ハ蕉翁の流を汲て常に樂しミ、又前後に草花梶を植、中にも海を愛し給ふとかや。……赤間閑薄遊

○長野隨有翁はその昔大友の士属にして、一郷の長たり。……亡人よのつねの文通に、兒孫のおゝき事をのみミづからも祝し、みづから薫ぐや、風雅にとりて淡く疎に、「撫子や雀と起て」など侍りし。……肥後日奈久詫人

○瓢々坊馬貞大雅を兩声庵素殘老師の俳兄と唱へたりしは、君が齡の一ツ長じ給ひけるゆへとは（ぞ力）。いかなればことし葉月と長月とに二老世を辭し給ふ。浅生翁の余緒たる人を失ひ采俳いかんとかせん。……備後福山野橋

○瓢々坊の主、吾地行脚の砌ハ、爐をわけ食を向うし給ひし兩声庵も古人となり、またその客も遷化し給ふ。いかなれば摺門の柱とも成し大老の主客としをかへず泉下におもむき給ふをいたミて、全達士

○瓢々坊の行脚、主せし比は、春秋いく度か飯食を供にして俳話こまやかなる時ハ倦事をわすれ、はからざりき風律子の文に身まかり給ひしをして、むかしをおもひ、くり言を一章につづけて悼を吐ク。全沙鷗

○命は法の宝、小夜の中山、さば風雅の上にも兩声庵主翁と七十余歳の貞を並て、終日誹談の盡ざるをにこめく。

あれはこそ星に掣の種子瓢フシベ 馬貞
 氣の減る鹿はきかむ市の戸 素殘

馬貞子に対して、

なびきあへ似たかゝの萩薄 素殘
 はなびて空に向ふいろ鳥 馬貞

とありて、互に長壽のちからくらべてして、また幾度かあふ秋を契らんと約し給ひしに、ことしいかなれば愚父も葉月末の二日に身まかり、馬貞子も菊月中の九日遷化有しと、風律子の文通におどろき、誠に贈答も今の記念となれり。一章を孤樂子へ贈る。……福山奇偶庵素殘

○……過し春ハ、予が寸草の思ひに、萩子が夢の曉をとて、「蝶咲や梢ゆらぎて筆の雨」と惠ミ給ひしを、秋の祝の水とハ、今こそ水にこたへそめけれ。筑後菊魚

○浅生翁あるとし筑前飯塚の駅に杖を留め給ふ比、やつがれ上洛の序にまミへて、夜ハすがら門弟四五人、種々のもてなしあり、饒別の句有。其坐の誹友、皆く故人に成給ふ。馬貞子独り残り給ふと思ひしに、過し年の霜と共に消へ給ふよし、正月中の比、市中庵主の方よりのしらせに驚き、有し世の句共、覚しま書付て昔を吊ふのミ。

真帆に吹風の一ツや糸柳 助然

見はらす山を雉子の朝聲 里雀

爐ふさぎの蓋の名残に膝抱て 馬貞

……熊本里雀

○遠山翁身まかり給ふと、市中庵主人よりの告に驚き、あゝはや無名庵にて語り閉せし事もむかし也けりと……波花真之

○馬貞翁風雅に鳴て、引杖にしばく中国・九州を驚し……広嶋風律

○馬貞大雅遠行せしとて比日告來り、驚き愁て、つきぬ噺、生前の湯会にさまくのこと共の有しを思ひ出し、あるが中にも柳眠堂にて、主人雅生とともに、二三宗、夜話して、夜の錦の巻に心をよせし半ばへ、彼馬貞子梅北がもとよりいそぎ帰り、中々熱に俳談し、殊に錦木のこと、衛の物語ども、くわしくて、聞き因も有しにと、猶々つきぬ操(マ、)事より起りて、全菴主

一 周 忌 (宝曆元年)

古桂・鯉木・利錐・破笛・貞五の外、豊前・豊後・肥後・筑前・長門・河内等、各地の作家五十二氏、別に表六句一(六氏)。

○……其後嗣古桂風土より西河津野々英風人が老に耄贈られし中に、この翁の其先に身まかりし百布生をいたミて、「何を常月日の耳のきりくす」とありしは、不日に朋なひしその身の辞世となりぬと聞へぬ。もとより百布ハ我身にもゆかり有る人にて、誠に世の中はあることも皆無き人の噺となりけりと、暫ものもゑいはれず咄しける。……豊前西谷僧水沙

○馬貞の翁に國ひがしの風筵に相見へしは、いとはやとせ餘りをも過ぬ。……(画)紫見

○長野氏馬貞居士ハ酒居山川を隔て、信に交る事四十年に近し。或ハ浪谷の師庵に薪水を汲あひ、赤間の関の舎に白き頭をつき合せて、流行の行衛を而已語りなぐさめ、年々小亭に麝香をぬひて、日は風雅にいさみ、夜は他力の佛恩を悦びしも、今年の秋先達たまひぬと伝へ、敏手

に涙を抑へ、称名と共に一章を述、同じ因ミの紗葉子・楚山坊、小庵に來りて、越方の事、兩山語り出して袖を濡し、燈下に筆をとりて、粗謝の追善とは成けらし。筑前福岡杏雨

○瓢々坊老雅ハ難波津の花の香を無名庵に嗅得てハ旅杖猶心に任せり。……いづれの冬にや、予が茅扉を敲れしに、「足拭て師走寐よとや梅の花」といはれしなど、ずし返して往事を思ふ端とはなれりけり。(筑前)成集亭和暢

三 回 忌 (宝曆二年)

古桂・鯉木の外、奥前・豊後・肥後の作家十九名、別に初裏二句目迄の連句(八氏)。

○亡師貞老翁常に薄を愛し給へり。……鯉木

○一年一固法師の庵に居給ひて、墨繪扇の姿を瓢々と名付て句有り。「感啼や草葉子かこふて雲の峯」……(豊前)大橋有隣

七 回 忌 (宝曆六年)

宝曆六子のとし、亡爺七廻忌に当りぬれば、凡国の地あらまし、水無月の末より行脚の一步をはじめ、爺が親しき好士を尋て、むかし今の事ども語り侍るも、手向のはしともなれかしと、風月の巻く拾ひものして、頭陀に納、葉月のすへに帰塵仕ふまつり、靈前に供へ奉りぬ。程なく長月十有九日になれば、聊なる法詠を興行奉り、共に一章の餘句をなして志を奉るのミ。

頭陀に花七尾の師の手向杖 后瓢坊拜

の後、和求の句を掲げ、奥前・豊後・薩摩・肥後・筑前等の二十氏、および表八句(八氏、脇古桂)・首尾歌仙(四氏、脇古桂)・短歌(三氏、四首)等を收め、八月ものする肥後陀人の跋を以つて結んでゐる。

○先師一とせ此國に越させ給ふ秋、百葉をおしむとは、むかし十三夜の高吟也。……薩州鹿府鷺三

十三 回 忌 (宝曆十二年)

古桂を初め、豊後高田の狐茶・玖珠の芳秋・備中の桃岸(但し明和元年臘月の文通)等、都合四句。

十七 回 忌 (明和三年)

古桂を初め、豊後・薩摩の十氏。

二十五回忌(安永二年)

來ル牛(午の誤り)のとし、亡翁翁の廿五年に當給ふける。然あれバ、今年予も古稀六翁になりぬ。來年と云露命も知らずあるに、引揚て當巳の菊月十有九日、聊の佛事やう行ひ侍りぬ。……

といふ前書の古桂の句、高田風月庵孤棗の二句のみで、直ちに忌日にもした古桂の跋を以つて終つてゐる。

以上を通覽する時、如何に古桂が、父馬貞の年忌々々を誠意の限り執り行つてゐることか、而も併人馬貞の年忌として、如何に意義あらしめようと、涙ぐましい迄の努力を払つてゐることか——甚だ感を深うせざるを得ない。その記録にしても、諸家からの追善の一つ一つを、彼自ら、極めて丹念に清記してゐるのである(——但し七回忌記人の跋のみは本人の自筆)

馬 貞 略 伝 (前述参照)

家大人、出生ハ寛文第十一亥ノ年也。俗名ハ長野与市郎通湯といふ。考祖統次が後へにすがり、前髪之比よりして誹門に入、茂林堂投筆と名のり、花にぬれ月にかへきて、此道に怠らず、八十年の露と消るまで樂ミ給へり。されバ統次ハ貞室・季吟の両師に隨ひ、皇都に足を運ぶ事年々、終に星霜功つもりて、「新玉海集」・「三燈集」等の諸集に名を顯し、滑稽の奥儀を擧り得て、しるし残して投筆に伝ふ。翁又投筆、浪花先生野坡翁の門人と成て、柴石堂馬貞と号を賜り、誦道の口訣のこらず給ひしより、風雅ます／＼盛なりき。然は三十の内より行脚して、志す所山海万里に一命を投うち、あるき神の恵ミを請て、京師・浪花・四國・山陰・山陽・筑紫の地、毎年風雅の住所と定て、たのしみ欲足らず。時に宝永三丙戌の春、三十有五にして、「七異跡集」を撰び給へり、四十八薩州鹿府にて祝章を伸、四十三の如月、何がし卿の詞にすがり、美麗をもとめず、あるにしたがへの二字を拾ひて、隨有と改名し、首を丸め給ひぬ。五十八柴石堂にて壽ぎ、享保十一丙午の春、猶はた諸国行脚仕ふまつりて、「柴石集」を編集侍りぬ。耳順ハ浪花老師の許にて七種粥に連泉を集て壽き、目出度ぞありける。其時老師瓢々坊の号を給ふ。古稀の賀ハ柴石堂にて祝し侍りぬ。延享元甲子のとし、又新に方丈の庵を構て甲子庵と号して諸方より発句を集む。ことし寛延三ツの年、惠方明りの霜後の颯々、ためしも今や太審の力癩に、八十歳の誕筵を開きて、

塩と霜似たり積日の松かざり

と、壽賀めで度、甲子庵におひて、子・孫・曾孫・玄孫、四十余人、入替へく対面して、松壽千とせの終りに方歳の声止事薄し。既に初夏にもなれば、浪花なる老師の息女政女の方より、遠山翁と叟号を送られ侍れば、悦事はた限りなし。すハ山郭公耳にふれ、早苗の杖もすこや

かに、暑さもつづがなく凌ぎ、下紅葉の葉月を待得てハ、數里の花野を踏わけ、木綿山の良夜を志して、そこに有ける娘が許に十日餘りいまして、蒼天雲晴たる木綿の清景を詠めやりて、

今も在す葉守の山の月見哉

其外ほ句數多有りけり。重陽ハ甲子庵にして、

玉の緒や是も咄の栗節句

と有し。後へにおもへバ、泉途の旅寐もあらかじめ心に掛りけるやと、今はた悲し。十三夜ハ山考が許に連衆をもよふして、夜すがら山川の美景を拾ふて、「立田河筆の櫛壺からげ渡らバ錦の風情なりけり」と興じて、

橋掛ん袖が枝葉の十三夜

十五日、帰庵して寺詣の折から、

鶉鳴や物誉好きの寺誘ひ

十六日、同国国東百布老人身まかられけると、便に訃られて、ア、久しき友なりけるにと、打しほれ給ひけるが、これぞ追悼の一章おくらばやとて、明る十七日、鷄明に句を作りて、古桂いかゞあらんと語られる。其句に、

何を常月日の耳のきりふす

かく口ずさきて、其日の午の時成りける比より、少例ならず打臥給ひて、終に枕上らず。古桂・鯉木・利維、其外誹朋數輩を伽として、ひねもす夜ハすがら眠らず、風雜の物語しバらくを止事なく、念佛と共に十九日巳の時、眠るがごとく呼吸も絶へ、終に黃泉の客とハ成給へり。その悲しみいふに斗なく、聲を上て袂をしほりぬ。泪の下に各飛花落葉を纏ず。今此きりふすの一章、まことや朝にハ人を吊して帰り、夕にハ人に吊らハると聞しが、百布を悼せし句ぞ、今ハ自らの辞世とハ成りける。つら／＼おもふに、八十年の中、指を屈て算るに、六十有五、年ハ世の塵凡をしらず、他をまじえず、只はいかいのミ也。げにや一炊の粟飯、それハ夢也、是ハ目前の遠山翁陶襟の樂ミ、揚て伸るに暇あらず。誠に佛神の加護也、冥助也けり。誹の一徳、此老翁也けり。無跡の文庫を探るに、一生の発句、凡貳千百余り。其中より七百四十余句を抜出して、「塵の峯」と号して一帖に書写し置給ひぬ。猶斧削を加へバ、こがらしの梢たるべし。然あれど、我心に叶ふて人に語るべき発句、一句もなしと、常に口すさび給ひき。今夢とはかなき机上の反古に殘し置れし近比の句を拾ひ留て、あらましの履歷を記し置、四方の悼の佳句を一帖に綴り集て、牌前に供る事とはなりぬ。

幻や風月の楯も

二歩庵

露しぐれ

古桂百拜

寛延三庚午菊月十有九日